現代社会学特論Ａ　最終レポート

ジグムント・バウマン　『リキッド・モダニティ　液状化する近代』

社会学部3年

23020156

大越　涼太

1 流動的近代の概念と社会学研究の類似性について

まず本題の流動的近代の概念は、社会学の研究と類似しているように感じた。常にというわけではないが、どちらも絶対的な価値や権威というものが存在しておらず、再帰的である。例えば、ハンナ・アーレントの悪の凡庸さは、ごく平凡な人間が行う悪について述べられていた。しかしながら、最近の研究ではアイヒマンが狂信的な反ユダヤ主義ではなかったという主張によって主張の確実性が揺らぎ始めている。ただし、アーレントの研究はナチスの精神構造の研究に大きな影響を与えたことは間違いない。このように、研究と流動的近代との重大な相違点は、過去の研究の基礎を成した先行研究を参考として保存しているのに対し、流動的近代においては使い捨てのように再帰される点である。流動的近代において使い捨ての危険性について述べられていたが、私自身の見解として、それ以上に危険なのはまだ利用可能なものでさえ、棄却されるという可能性である。要するに、研究においては古典的な研究を参照として（いい研究か悪い研究かはともかく）、新しい研究を生み出そうと試みるのに対して、流動的近代においては、ある物体や理解が規範の変化に伴って疎外されたり迎合されたりするため、物事自体の進歩や有効性が不確実になってしまう。

2 流動的近代の絶対的価値に対する私自身の経験からの見解

確かに、社会としての絶対的価値は流動的であるという点には賛成できるが、個人や小集団の価値というものは現在も実在しているように感じる。現代を生きている私自身の経験・感覚としては、終身雇用という雇用形態は非常に重苦しく抑圧されたようなものに感じる。私は幼少期に父親や周囲から、国公立大学に進学し大企業に就職し、結婚して家庭を支えるというような話を散々聞かされた。私にとっては、選択肢が存在せず、とても息苦しく感じた。恥ずかしながら、大学受験は失敗し浪人生活を送ったのだが、その後の生活の方がどこか解放された感覚があった。それは、単純に大学受験から一時的に解放されたという感覚ではなく、一度逸脱という道に逸れたことで、絶対的で独占的な規範からの脱却という感覚が存在していた。著作の中では、規範から逸れてしまうことの危険性について述べられていたが、一度規範から逸れるという行為が必ずしも負の影響を持っているとは言い難い。特に、私の例であれば、支配的規範からの脱落は負の影響ではなく、正の影響であったといえる。

3 第2章「個人」と流動的近代に対する私の見解

第2章では「個人」について述べられていた。重い資本主義下においては「健康」、一方のリキッド・モダニティにおいては「体力」と表現されている。健康は社会が策定し、割り当てた役割を、継続して遂行できるだけの、人間の肉体状態ないし精神状態の事であると述べられていた。一方の体力は、柔軟性、吸収性、適合性があること、未経験の感覚、予想外の感覚にも対応できる準備があることだと述べられている。確かに、日本の戦後、特に高度経済成長期において、成人男性のライフコースは策定されていた。フォード車のような製造業の飛躍的な進歩と未来の希望を共有した人々の様子が見られた。それは、上記に述べたような、同じ終身雇用で正社員として働き、健康に何も問題なければ解雇されることはなく働くことが出来るという精神的な保障にもなりうる。しかしながら、バブル崩壊後は安定した職業は獲得されにくくなり、不安定な時代に突入していた。

私自身の意見としては、確立した基準の放棄は、格差がより開いてしまうのではないかという危惧と、一方で確固たる何か（生まれ持ったアイデンティティなど）を持っていない人が瞬間的にでも輝きを放つ機会があるのではないかと感じる。私が浪人した経験は少し論拠としては十分ではないが、絶対的価値の変容が意味するのは、社会・労働の資本からの離脱および不安定性の側面だけでなく、一度挫折を経験した人間に対しても機会を享受してくれる社会の側面を帯びているように感じる。就活を行っている友人の情報では、会社の面接内容として、挫折経験が問われるようである。挫折を乗り越えた経験を要求するにもかかわらず、リスク回避をしようとする企業には少々倒錯を感じるが、企業一般としても挫折と乗り越えた経験はある程度価値として見なしていることがわかる。

4 政治のテレビショー化に対する感想

政治の私的事情のテレビショー化という点には合点がいく。その一例として、「ガーシー」という、テレビタレントだけでなく、政治家のスキャンダルやトラブルを暴露する人間がYoutubeを媒介して台頭してきた。彼の場合、私怨なのか復讐心なのかは不明であるが、自分自身が親交のあった有名人の秘密を暴露することによって、一般市民の支持を得た。その結果、国会議員としてさえ当選することとなった。エンタメ業界の改革を公約として語っているが、彼の影響で政治自体の由々しきエンタメ化が促進されていることに関しては、あまり言及されない。朝のニュースや情報番組では、ウクライナ戦争の現在の状況や国会で執り行われた決議にとって代わって、芸能人や公人の私的情報が頻繁に報じられている。また、政治家の印象に関しても、菅（元）総理がパンケーキを食べるなど、政治家の職務自体の評価ではなく、趣味や嗜好などの私的情報が注目を浴びることがあった。この現象は、単純に政治の私的領域の浸食ということを意味するだけでなく、政治に関して検討する媒体・メディアの減少が危惧される。現在NPO法人などが中間集団としての役割を果たそうと試みているが、現状としてはまだ不確定要素が多い印象を受ける。私自身のNPO法人で学生アルバイト兼ボランティアとして従事しているが、政治や現代社会を語る場所として機能していないのは明白である。また、地域の行政とは連携を行っているが、支援金などの継続に関わる金銭的な保障は受けられていない状況である。とどのつまり、情報収集においても個人に責任をもって集める必要が生じてきている。ニュースや情報自体の収集自体も個人化しつつあることが上記の事例からもうかがえる。政治参加において、というより民主主義下において、宇野(2020)の著作、『民主主義とは何か』（講談社現代新書）の文中にて「民主主義は参加と責任のシステム」である、と古代ギリシャのポリスを基盤とした説明がされていた。しかしながら、言わずもがな国民の参加は果たされていない一方で（投票率の低下）、国民個人の責任自体が肥大化している。

それに加えて、著者は「政治という見世物は、利益よりアイデンティティの方が大切だと、執拗に強調する宣伝行為、また、あなたは何ができるかより、あなたがだれなのかのほうが重要だと思わせる継続的訓練のための行為になってしまった」と述べている。そのような状況は日本の社会に還元しても的を射ていると菅総理の例から説明できる。

最近の驚くべき事態として、防衛省がインフルエンサーを利用することで、防衛予算増額を国民に促進させることを図っていた。これには、プロパガンダであるというコメントや、世論工作であるというコメントが散見された。ところで、Youtuberの熱狂的なファンの事を“信者”と表現されることがある。敗戦後まで遡ると、国体護持を維持するのが困難になり、信仰共同体が消失した中で、民主主義化とともに個人化の波が到来した。その潮流のなかで、個人の信仰対象はより多様化を極めていることがうかがえる。その中で、国の一機関が信仰対象になりうるインフルエンサーを利用することが意味するのは、イデオロギーを一般市民に植え付けるプロパガンダであると批判されても可笑しくない。さらに付け加えるとすると、2020年の日本学術会議の任命問題に関して、当時の総理大臣であった菅首相が、日本学術会議の推薦した学者計6名を任命拒否する事例があった。それに対して、『シリーズ戦争と社会「戦争と社会」という問い』の文中では、日本学術会議が目指してきた「人類の平和」とは著しくかけ離れており、思想・信条の自由、学問の自由よりも「国家安全保障」や「日米同盟」を最優先させる発想であると非難されている。最近では、過去に比べて若い有権者の投票率が減少していることがメディアで取り上げられることが頻繁にある。これは、単純に若者の政治関心が低下しているともとれるが、政治自体の基盤の在り方の揺らぎとも見ることが出来る。

5 第4章「仕事」と流動的近代に対する私の見解

第4章では、仕事に関してより深い理論が展開されていた。私の最も印象的であった箇所は

「人類の普遍的グランド・デザインや、一生をかけた天職という概念からはっきり切り離された仕事は、いまや、「暇つぶし」とでもいった方がいいだろう。運命論的な意匠を剝奪され、形而上学的支柱をはずされた仕事は、重厚な資本主義、堅固な近代を支配していた価値の星雲のなかで割り当てられていた確固とした位置をも失ったのである。仕事もはや自己、アイデンティティ、生活設計の足場にはなりえない。それは社会の倫理的基礎とも、個人生活の道徳的機軸とも見られなくなった」

　という箇所である。奇遇にも現在私のゼミでは、ブルシット・ジョブの計量統計的分析を行っている最中であった。ブルシット・ジョブとは、人類学者のデイビッド・グレーバーが提唱した用語である。ブルシット・ジョブとは、社会的価値がないのにもかかわらず、経済的報酬（収入）は高い仕事のことを指す。また、もう一つの定義として、労働者本人が自分の仕事が役に立っていない・無駄であると感じている場合は、その仕事がブルシット・ジョブとなりうる。ブルシット・ジョブの主な例として、取り巻き：誰かを偉そうに見せたりするために存在する仕事（ドア・アテンダントなど）や、尻拭いの仕事などが挙げられる。私達のグループは、「労働者の自己実現意識が自分の仕事の社会貢献意識」にどのように影響するのか、「そして会社の管理形態などの社会的関係が、労働者の自己実現意識に如何に影響するか」という2点をテーマに分析に取り組んだ。まず、社会的関係の分析における結果として、”上司が尊重してくれる”・”自分で自分の仕事を管理できる”などの会社の温情で柔軟な管理体制（変数）が、労働者の自己実現意識（変数）に大きく影響していた。つまり、この結果からも推測できるように、本人の自主性が保たれていることが、労働者の自己実現に必要であることがいえる。次に、本人の貢献意識に関して、自己実現意識が大きく関連していることがわかった。つまり、労働者自身が自分の仕事が役に立っているかどうかの一つの指標として、自分自身の自己実現程度が強く関連しているということがいえる。しだがって、自分の仕事の価値を労働者自身が判断づける材料として、会社の管理体制から影響を受けた労働者の自己実現程度が関連しているのである。この結果に対して、対偶から述べると、本人の貢献意識が高くないならば、会社の管理体制が乏しいことがうかがえる。今回の計量分析は時系列的に完璧とは言えない部分も多数存在しているが、著者の述べる労働者の希薄になったアイデンティティと普遍的なグランド・デザインから離れた仕事の関連をある程度立証するための根拠としての可能性を感じた。

6 第5章「共同体」と流動的近代に対する私の見解

第5章では、共同体に関して、民族主義などの観点から述べられていた。その中で私の意見として最も印象的であった部分は、

　近代の流動的状況にとって現実的で、存立可能な統一性（連帯の形式）といえば、これ（調整と仲裁によって作りだされた統一性）以外に考えられない。信念、価値、生活様式はすべて「民営化」され、文脈から切り離され、「移された」―移された場所も、永住できる家というより、モーテルを思い出させるような場所に過ぎなかった。

　という箇所である。信念や価値などが民間化されているという点は、一種の社会運動（政府や企業ではない第3セクター）としての役割を果たす意味で、日本でNPOが盛んになった背景としても関連付けられる。

実際に現在の若者（あいまいな表現ではあるが、20～30代と定義する）は、かつては”夢の一軒家”であった戸建てより、老後のリスクが少ないマンションに住むことを希望する人が増加している。これは、生活様式までもが固定的なものから、流動的になっていることは比喩的な表現（モーテル）ではなく、実際の社会現象として引き起こされているということがうかがえる。さらに、この現象から、若者の安定ないし安全（の暮らし）の概念が大きく変容しており、固定的なものを手に入れる安全だった時代から、リスクを回避し固定的な安定を継続しようとする安全に徐々にシフトしていったことが示唆される。

7 本稿の限界

私の感想の限界は、圧倒的に日本社会の歴史や趨勢を網羅していない点である。リキッド・モダニティを日本社会のコンテクストおよび観点で述べるには、広範に及ぶ経済・政治・戦後の動向を抑えたうえで意見を述べる必要があるが、本稿ではその境地に及ばなかった。